深励所持の玄一『無量寿経記』（龍谷大学図書館蔵）をめぐって

佐々木　大悟

1　先行研究

『無量寿経記』は新羅で七世紀頃に活躍した玄一が『無量寿経』に註釈をほどこしたものである。現在、朝鮮半島にも中国にも写本の存在はみられず、日本にのみ写本が残っている。近年、南宏信氏は宮内庁書陵部の玄一の『無量寿経記』の翻刻をおこない『日本古寫經善本叢刊　第五輯　書陵部藏　玄一撰　無量壽經記　身延文庫藏　義寂撰　無量壽經述記』（國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所　文科省戦略プロジェクト實行委員會、二〇一三年。以下では『善本叢刊』と略す）が出版された。これにより、玄一の『無量寿経記』の日本での所蔵について多くのことが明らかになった。そこでは氏によって①宮内庁書陵部本、②大谷大学丹山順芸写本、[1]③大谷大学嘉永七年書写本、④京大本　蔵／一一／ム／一（＝③の青写真版）、⑤京大本　蔵／一一／リ／一の紹介がなされている。特に貴重な宮内庁書陵部本の写真と翻刻が明らかになったことによる学術的意義は大きい。

	『無量寿経記』の諸写本	請求記号	時期	備考
①	宮内庁書陵部本	七五五四	奈良時代	
②	大谷大学丹山順芸模写本	宗丁2		①の臨写
③	大谷大学嘉永七年書写本	宗大2477	一八五三	興雲寺本を書写
④	京都大学卍続蔵経本	蔵／一一／ム／一		③の青写真
⑤	京都大学蔵写本	蔵／一一／リ／一		①の後半の書写

また同時に、そこではいくつかの未解決な問題も示されることとなった。たとえば、高山寺との具体的な交流(2)に関する問題や、本文が移動していることに関する原因(3)、卍続蔵経本へとつながる諸伝本の具体的な関係性の問題(4)などである。

本稿では南氏の示された諸本のほかにさらに二本ある『無量寿経記』を含めて考察していく。すなわち⑥龍大蔵本と、⑦大谷大学圓光寺旧蔵本(5)である。そのうち、龍大蔵本は、高山寺との関係や、卍続蔵経本テキスト系統の形成の解明に資する重要な本であると考えられる(6)。また後半では、『無量寿経』の諸註釈書を使用することで、当該『無量寿経記』書写の問題を別の側面から考察していく。

結論を先取りすると、龍大蔵本は書陵部本と嘉永七年本（＝卍続蔵経本）のちょうど間に入る中間的な形態をもつものであるとみることができる。

2―1　龍谷大学蔵新写字台文庫寛政十一年『無量寿経記』（⑥）

『韓国仏書解題辞典』などの情報には載っていないが(7)、龍谷大学図書館には『大本玄一疏』というタイトルを持つ

文献が存在する。一見するとどのような種類の本かわかりにくいタイトルであるが、「大本」はまれに『無量寿経』の別名として使われる[8]。本書は玄一による『無量寿経』の註釈書であり、先述の一連の玄一『無量寿経記』の一つと考えることができる（玄一の註釈書の名称は「無量寿経記」[9]であったり、「無量寿経疏」であったり、「両巻無量寿経疏」であったり、あるいは「玄一疏」とあるなど安定していない）。先行の研究にこの龍大所蔵深励本（本稿では統一のとれていない表記ではあるが「龍大蔵本」と記す）をあわせて考察することで、諸本の関係性について明確になると考えるため、本項で紹介をおこなっていく。玄一の『無量寿経』註釈書テキストにおいて、本来もっとも関心の高い問題は下巻が存在するかどうかということであるが、残念ながら本写本も下巻部分は存在せず、上巻のみとなっている。

龍大蔵本の請求記号は〇二四・一／一五〇―W。毎半葉二四字一〇行、全四十二丁、和綴じ一冊、縦二四・六糎、横一六・五糎。大学図書館内における分類としては写字台文庫（そのうちの新写字台文庫）となっている[10]。

一行の字数は二十四字であり書陵部本と同じである。破損部の形も書陵部本と類似した形で模写している。龍大蔵本は巻子本ではなく和綴じ本であるが、書陵部本を見て写していると考えられる。開始位置は途中からはじまっている。その位置は少し後につくられた丹山順芸写本と同じであり、修理された後の書陵部本よりは、7行ほど後ろの位置よりはじまっている[11]。表紙の見返しに「高山寺」の朱方印が筆で模写されている。最後には書陵部本と同じく「両巻經記　釋玄一集」の尾題がある。

書は（識語によると）瓊林によるものであり、書陵部本や、丹山順芸臨写本の筆致とは異なったものである[12]。

本写本（龍大本）では、了慧（一二四三―一三三〇）『無量寿経鈔』に引かれる本文との相違を朱書きで載せている。写本本文を『無量寿経鈔』の引用箇所と比較して、朱書きで別の本文の可能性を示唆している。

識語は以下のとおりである。龍谷大学図書館のR―WAVEにのっているデータ上では最後の「越州深厲識于京兆

高倉寮」とあるだけであったが、(13) 実際には全体で二〇〇字程度の量の識語が存在する。

題大本玄一疏一巻後

大無量壽經玄一疏者出東域長西二錄望西樓鈔往々引之則本邦古昔傳此疏炳然而今未見其本現行于世爲憾年尚兵遇哉雖歲夏聞梅尾高山寺有明惠上人珍藏本一巻密允求其司藏人乃發遣侍者瓊林令臨摹之并校無差別疏領要鈔實寬政十一年己未秋八月六日至十一日功畢兵因而惟之如支那國及唐代五季之衰王道陵夷兵革無寧內教古典亦多罹兵火是以于宋于明所撰集一切藏經中無此等章疏也但我東方所傳墳典不啻趙璧隋珠今猶儼存致使我曹在千載末閱其眞本嗚呼其稱大乘相應之地豈不宜乎云爾

越州深儁識于京北高倉寮

写真①

題大本玄一疏一巻後

大無量壽経玄一疏者出二東域長西一録一望西樓之一鈔往々
引レ之則本邦古昔傳二此疏一炳然而今未レ見二其本現一行于世一
為レ憾年尚矣遇ナル哉維歳夏聞二栂尾高山寺有一明恵上人珍
藏本一巻一密乞二求其司藏人一乃發二遣侍者瓊林一令下臨二摹之一
并校中無差別疏領要鈔上實ニ寛政十一年巳未秋八月六日至ニ
十一日一功了矣因テ而惟レ之如二支那國一及二唐代五季之衰一王
道陵夷兵革無レ寧内教古典亦多罹二兵火一是以于レ宋于レ明
所二撰集一一切藏經中無レ有二此等ノ章疏一也但我東方所レ傳ノ墳典不二
啻趙璧隋珠一今猶儻存致レ使下我曹ヲシテ在二千載末一閲中其眞本上鳴
呼其稱二大乗相應之地一豈不レ宜乎ト云爾

越州深厲識于京兆高倉寮

これによると、深励（一七四九―一八一七）は高山寺が蔵している玄一の『無量寿経記』一巻の存在を知り、密かに司蔵のものにお願いして見せてもらい、侍者の「瓊林」を遣わして書写させたということがわかる。そしてこの本を書写しおえたのは寛政十一（一七九九）年八月六日から十一日であることが記されている。

書陵部本は奈良時代の写本とされ、他の諸写本に比べて古いものである。これまでの情報では、その次に古いものは大谷大学蔵丹山順芸写本[14]であったが、当写本はそれよりもおそらく三〇年[15]ほど古い写本（一七九九年）ということになる。龍大蔵本は江戸・明治期と考えられる三写本（②③⑦）のなかで最も古いものであり貴重である。

2―2　高山寺との関連について

この龍大本により、高山寺との関係についてこれまでより詳しい情報を得ることができる。まず先述したが「高山寺」という朱で書かれた印の形のものがあること、これは写したもとの本に高山寺の朱方印が捺されており、それを模したことを示していると考えられる。そしてこの識語に「聞二栂尾高山寺有二明恵上人珍藏本一巻一密乞二求其司藏人一乃發二遣侍者瓊林一令下臨二摹之一」とあることから、具体的に高山寺で見せてもらい、それを写した経緯が確認できる。この二点により、龍大蔵本は高山寺にあった本を書写している可能性が高いと言うことができる。

2―3　香月院深励について

ここにでてくる深励（香月院深励）は大谷派の第五代目講師である。寛政十一年は、彼が本講をおこなう五年目にあたり、彼としては充実期にあたるため、侍者を遣わして書写させたという記述はそう不自然ではないと思われる。また深励は（識語にもあるように）望西楼了慧の『無量寿経鈔』等で玄一の注釈書が引かれており（その他にも峻諦『無量寿経会疏』になどにも、玄一『無量寿経記』は引かれている）、どこかに玄一の『無量寿経記』が存在している可能性があることも認識していたと思われる。本講で『無量寿経』を講じる立場としては玄一の『無量寿経記』のオリジナルは必要なものである。講師として、手元にできるだけ多くの註釈書などの蔵書を揃える必然性はあったと考えられる。後に同じく『無量寿経』の本講をおこなうことになる第八代講師の易行院法海（一七六八―一八三四）も当該の『無量寿経記』を貸してもらうよう深励の所属寺であった永臨寺に依頼している。(16)

実際に三年後の享和二年（一八〇二）には深励は『無量寿経』の講義（本講）をおこなっている。(17)同年成立とされる深励『無量寿経講義』では、

近年私には栂尾の蔵中より玄一疏を借り得たり。即ち明恵上人所持の本を寫し取る、夫故此度の講説には右三大

家の上に玄一の疏を加へて。四大家の疏をば見合はすることなり。…（中略）…右申す處の漢土の四大家いづれも釋義の龍象ゆゑ。文義を解するには取り用ゐることもあり。[18]

として、この龍大蔵本の識語と一致する内容の文章をあげている。『玄一疏』（『無量寿経記』）の評価も高く、浄影・嘉祥・璟興と合わせて大経の四大家としている。これらのなかで『玄一疏』だけが上巻しかないが[19]、他と並びうるものと価値づけたのは、この希少性にあったと考えられる。これらの記述により深励は実際に『無量寿経記』を手に入れて使用していたことがうかがえる。

2―4　書写者の瓊林について

この侍者とされる「瓊林」という人物については、香月院深励の弟子の名簿である『垂天結社簿』によると、その四三の数字が付される人物で、越前の伊井村（現あわら市）の應蓮寺の瓊林であることがわかる[20]。越前の金津（現あわら市）永臨寺の深励とは同郷の弟子となる。同じく應蓮寺所属の瓊林の弟寂林も深励門下であり、『垂天結社簿』に記載されており、兄弟で香月院の弟子であったことが分かる。この『垂天結社簿』との情報の一致により、深励による識語の内容は信憑性が高いものであることが分かる。

この龍大蔵本をさらに写した本には、伝承では易行院法海のものがあり、また実際に残っているものとしては、次に見る嘉永七年本がある。

3　大谷大学蔵嘉永七年本との関係

大谷大学には、丹山順芸写本とは別に、もう一つ美濃興雲寺本から謄写したとされる嘉永七年（一八五四年）『無量寿経記』が存在する。これは京大本 蔵／一一／ム／一が青写真でうつすところの原本である。

当該の龍大本を含めた関係性を考えると、

書陵部本　→　龍大蔵本　→　嘉永七年本

という流れを見ることができる。[21] そのように考察する理由は以下のとおりである。

3―1　筆致

嘉永七年本の筆致は書陵部本や丹山順芸写本のように流れるような形では書かれておらず、龍大蔵本（＝瓊林の字とされる）に類似している。

また龍大蔵本と嘉永七年本はともに和綴じ本となっている。（一方、書陵部本や丹山順芸写本は巻子本となっている。）

3―2　朱書き箇所

龍大蔵本は最初の部分の欠落箇所を朱書きで埋めることをしているが、埋めている箇所と埋めていない箇所（空白のまま）がある。嘉永七年本を見ると、その朱書きで埋めている箇所と埋めていない箇所が龍大蔵本と同じであった。[22] 龍大蔵本を見ており、それを朱書き部分も含めて踏襲しようという意識があったと思われる。[23] また龍大蔵本は前半を中心に『無量寿経鈔』に引用される玄一のテキストの文字情報を朱で右に書く（合計五箇所）が、嘉永七年本はその朱書き箇所もすべて参照している形跡がある。

3―3　校異

また校異からも考えてみたい。南氏が書陵部本と卍続蔵経本（嘉永七年本の青写真に少し修正をして活字化したもの）との校異を示しているが[24]、その校異結果と龍大本の本文を比較したとき、卍続蔵経本の読みは、書陵部本と異なり、独自の読みを示す箇所もあるが、その場合のほぼ全てが龍大蔵本と同じ文字を示していた。また龍大蔵本とも異なっていた校異があった場合も、龍大蔵本の字の書きぶりが、嘉永七年本がそのような字として読む可能性のある形の文字であるものもいくつかあった。それらの状況は嘉永七年本（＝京大本→卍続蔵経本）が龍大本の系統から書写されていたことの証拠になる。

3―4　若干の相違点について

このように二者間の類似点は多いが、相違点も存在する。それは一行の字数である。龍大蔵本は（書陵部本などと同じ）一行二十四字であり、一方の嘉永七年本は一行二十字となっている。

また嘉永七年本は、「菩薩」を「并」とする抄物書きも用いられており[25]、それも龍大蔵本とは異なるところである。龍大蔵本は、「菩薩」としてすべて略さない書き方で書写している[26]。

3―5　大きな移動箇所について

以下では、嘉永七年本が龍大蔵本の流れであることがほぼ確実であることの一番の証明となる本文の大きな移動の問題について見ていきたい。

それは重誓偈（三誓偈）に相当する部分の「消除三垢冥」から重誓偈直後の「應時普地六種震動」の所釈に相当するところについてである。これが龍大蔵本と嘉永七年本との関係を示す重要な痕跡となっている（3―5以下では、

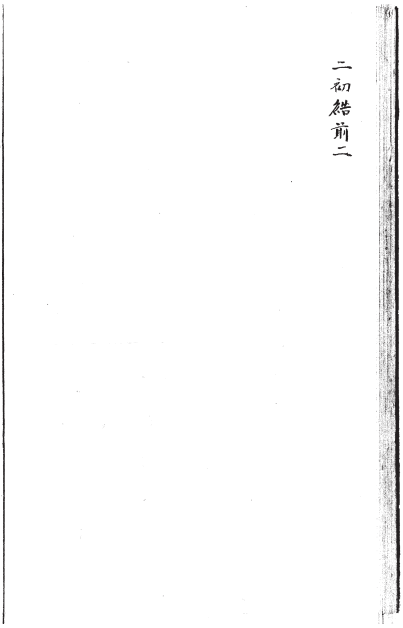
文章では非常に説明しづらい内容となるが一応試みる）。

3―5―1　書陵部本

まず書陵部本では、正しい位置で所釈となる『無量寿経』の本文が置かれてあり[27]、意味から考えても説示順序は正しいものと言える。

3―5―2　龍大蔵本（写真②）

龍大蔵本の当該箇所（二十二丁左）で、書写者（瓊林）は写し間違いをした。瓊林は紙を半丁分まで使用して、左にうつった1行目でミスをし、本来なら、「位云第二文中、有三。一、動地。二、雨華。三、聲樂。…」と写すべきだったところを、直前に書いたはずの「二、初結前。二」をもう一度写してしまった。その時点で瓊林はミスに気づき、書写をストップさせ、以下の行をすべて空白にしている（写真②）。すでに右半分は正しく書写していたため、それを活かそうと思い[28]そのまま使用した。次にその反対側の半丁を書写するために新しい一紙を使用した。今度は右半丁を空白にして、左半丁から書き始め書写をおこなった。そうすることで二枚の紙を使って約一枚分の量の書写をおこなったという形で示そうとしている（実際、丁数でいえば二丁分あ



写真②

るけれども、丁数の換算としては一丁分で数えられている）。ところが、それを綴じる過程でどういう訳かその二枚を順番として反対に閉じてしまっている。そして、もし後世の読み手がそのまま読んだ場合、本文としては一部誤った順序で読んでしまう箇所が出来上がってしまっている。

3―5―3　嘉永七年本

次に嘉永七年本は、本来の正しい順序と比較すると、（懸念のとおり龍大蔵本の当該箇所の仕様にひきずられてしまい）この箇所で本文が反対になっている[29]。

さらに嘉永七年本は書き損じ部分（「二、初結前。二」）も書き損じと見抜けずに、有効な一文であると考えて本文化してしまっている。このようなテキスト上の混乱が（原因は龍大蔵本のミスと綴じ方の問題にあるのだが）嘉永七年本の書写を通じて固定化されてしまったことが分かる[30]。[31]

これらのことから嘉永七年本はほぼ確実に龍大蔵本の系統のものということができる。

嘉永七年本には「嘉永七年甲寅首夏中旬第一日謄寫竟　右原本在濃州興雲寺」という奥書がある。南氏は写したもとの本である「濃州興雲寺藏本とは書陵部藏本あるいは順藝書寫そのもの、又はその系統に属する傳本の「謄寫」を指すことになろうか」[32]としているが、内実を比較すると書陵部本や順芸写本から写しているのではなく、龍大蔵本系統を経由して写していることが今回の分析により分かった。よってこれら想定のうちの「又はその系統に属する傳本」が適切で、より具体的には「龍大蔵本の伝本系統」（＝書陵部本を写した龍大蔵本の系統）が興雲寺[33]にあり、それを書写したとすることができると筆者は考える[34]。[35]

3―5―4　それ以後の京大本と卍続蔵経本のテキストに関して

本筋からは少しそれるが、実はこのテキストの混乱（移動）をある程度目印をもとに修正することが可能である。玄一『無量寿経記』は『無量寿経』の逐語解説的な註釈書であるため、本文中の所釈の位置を意識することによって乱れた並びを正しく戻すことができる。「消除三垢冥」は重誓偈の一部であるので、本来なら、その次には、「重誓偈（三誓偈）」のそれより後ろの部分（「広済衆厄難　開彼智慧眼…当雨珍妙華」）が、註釈されるべきである。京大本蔵／一一／ム／一[36]は嘉永七年本の写真複写であるが、そこではおそらくその点を目印にしてそもそも入れ違いになっていた一紙をもう一度反対に移動させることでおおよそ正しい位置にしている。この卓見によって本文は幾分正しい形に近づいた（南氏は「『卍續藏經』も修正してはいるが、完全ではない」と述べている[37]）。完全には戻すことができない理由は、そもそも龍大蔵本二十四行×十行＝二四〇文字のもの（半丁分）が入れ替わっており、戻す際は京大本二十行×十行＝二〇〇字のもので入れ替えたためである。テキストとしては理論的には二四〇字―二〇〇字で「四〇文字」ほど余分な部分が戻されないまま残存してしまうはずである[38]。

実際に京大本（そしてそこから翻刻された卍続蔵経本）では、想定どおり「名。二門勝行。上來明願已。自下、第二明勝行人。有經曰阿難時彼比丘也。若有願無行。願卽虚偽。若有」という三九文字（校異の関係で一字分減る）だけが本来あるべき箇所と全く異なる箇所へ置かれるという現象がおきている。

このような経緯で京大本、そして卍続蔵経本の『無量寿経記』テキストは作成されたということができる。

4　まとめ

『大本玄一記』は、一見タイトルからその内容は判然としないが、昭和二三年頃から龍谷大学に所蔵されていた玄一の『無量寿経記』である[39]。南氏の著書によって龍大蔵本周辺の諸本の状況が明らかになったことで、これまで十分

には価値が定められなかった本写本の位置づけが定まってきた。

龍谷大学蔵本は写本の書写年代は、現在確認されている『無量寿経記』のなかで二番目に古いものである。今回見たようなテキストの関係性のなかで龍大蔵本の存在を考えると、卍続蔵経本へとつながる系統を形成することになった書写本のうちの第一番目の本ということになる。龍大蔵本を合わせて考えることにより、これまでより順を追って個々のテキスト上の変遷の問題を推測することができるようになった。

具体的にいかにして現行卍続蔵経本テキストが生まれたのかをここで再確認すると、まず書陵部本から龍大蔵本が写された。この龍大蔵本（一行二十四字）の系統を写したと思われる本には、大谷大嘉永七年本（一行二十字）がある。そして嘉永七年本から青写真の京大本へとつながり、本文にいくつかの修正などが加わって卍続蔵経本テキストが形成された(40)と想定することができる。

■系統図（縮小版）

書陵部本 → 龍大蔵本 （→ 興雲寺本？） → 嘉永七年本（＝卍続蔵経本）

ちなみに日本の『無量寿経』の註釈書における玄一『無量寿経記』の引用に関して言えば、実際に見て引用しているものと、実際に見ていないで引用しているものがある。深励以前に、浄土宗では了慧『無量寿経鈔』、本願寺派では、峻諦（一六六四―一七二〇）『無量寿経会疏』や慧雲（一七三〇―一七八四）『大経安永録』などが代表的な註釈書であるが、それぞれの『無量寿経記』に対する言及を見ていくと、まず、了慧は、

一鈔中、所引如二法位・玄一・義寂等一者、其書未レ行恨今無レ由二校讎一也。或謂レ入已尚矣。不レ知果然

否。其他至レ如二外典一閒又質二之本書一且鈔主引用大抵従二信瑞音義一、與博古者決焉。(41)

とあり、その実物はみれておらず、間接的引用であることを示している。

次に峻諦は

若し広く諸師の解釈を挙ぐれば、元暁、浄影、嘉祥、玄一、法位、憬興、義寂等各々註疏あり、現に流布するものはただ暁、影、祥、興の四家のみ(42)

と述べている。やはり峻諦も玄一『無量寿経記』の実物は持って（見れて）いないようである。

また慧雲の『大経安永録』では

有二浄影二巻・嘉祥一巻・元暁一巻・璟興三巻一。現存肆行。（中略）玄一二巻・義寂三巻・法位二巻等。此等数部。雖レ不二現行一。時在二望西等古鈔中一而見レ之。(43)

と述べており、慧雲も『玄一疏』は現存していないとしている。

深励の師の一人である、理綱院慧琳（一七一五―一七八九）『無量寿経貫綜記』巻一では、同じく四部を現存とし、

述義記三巻　義寂撰
疏二巻　法位撰
記二巻　玄一撰
已上三部望西鈔中引用(44)

としており、玄一『無量寿経記』は現存しておらず、そのため『無量寿経鈔』から引用したことを示している。

深励が入手した後において、例えば深励と交流があったとされる道隠（一七四一―一八一三）は『無量寿経甄解』（一八一一年）を出しているが、そこでは

因辨此經末釋者、元暁・淨影・嘉祥・玄一・法位・憬興・義寂等各有註疏、於中、唯暁・影・祥・興四家現存。(45)

と示し、玄一『無量寿経記』は現存していないという認識を示している。

そのようななか、高倉学寮では一七九九年、深励の指示によって高山寺から書写がおこなわれた（＝龍大蔵本）。深励はおそらく実物の玄一『無量寿経記』テキストを所持し使用して『無量寿経』の講義をおこなったはじめての人物と推測できる。再度引用するが、『無量寿経講義』では

近年私には栂尾の蔵中より玄一疏を借り得たり。即ち明恵上人所持の本を寫し取る、夫故此度の講説には右三大家の上に玄一の疏を加へて。四大家の疏をば見合はすることなり。(47)

とあった。本来は、『無量寿経』の註釈書を列挙する箇所にこのような叙述を入れる必要はないが、おそらく『玄一疏』の発見・書写と近い時期に講義が行われていたため、このような記述が挟まれていると思われる。

深励門下をはじめとする高倉学寮(48)では深励所持本を端緒として多くの『無量寿経記』写本がつくられるようになっていったと考えられる。(49)そして深励以降は、実際の現物の『無量寿経記』を見て引用することがおこなわれた。深励と同じく随慧に学んだ易行院法海（一七六八―一八三四）が、深励所持本『無量寿経記』の書写を永臨寺（＝深励の所属寺）に依頼している手紙も存在している。

一書呈申候　春暖之節
益御安程可被成御法務
奉遙賀候拙衲無恙所罷有
御安心可被下候。　然者当夏
『大経』講説相勤候ニ付貴院
御所蔵之『玄一疏』致拝借

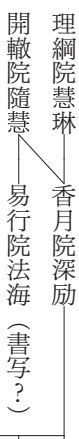
度奉希候　書写了候ハバ
早速返呈可仕候間、何とぞ
急〻御登せ下被候様　偏ニ
奉憑候。右得尊慮度以
寸指如是御座候　勿々頓首
閏三月十六日　法海　（花押）
永臨寺様
猊下
尚々御母公様へモ乍憚
宜しく被仰奉托候　已上(50)

とあり、深励の所持していた『無量寿経記』の閲覧・書写を依頼している。法海は『無量寿経庚寅録』のなかで、

玄一ノ記ハ中古已来久シク世ニ傳ハラザル所ニ。先年私共栂尾高山寺ノ明恵ノ藏ヲ探シテ幸ニ玄一ノ記一巻ヲ得タルコトナリ。下巻ハ亡ビテ上巻バカリ存シテアリ。直様ソレヲ寫シ取リタルコトナリ(51)。

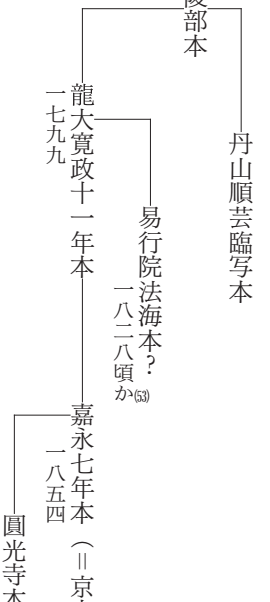
と述べており、ここからもおそらく実際に所持したうえで講義していただろうことがうかがえる。これらのことから、依然として貴重であった玄一『無量寿経記』の貸借と書写が、高倉学寮内でおこなわれ、それを講義などの助けにしていたことがわかる。

図　高倉学寮と玄一『無量寿経記』の書写



また、註に示した情報を含め、高倉学寮のなかにおける玄一『無量寿経記』の書写を系統図にまとめると、現在のところ以下のようになると考えられる。

■系統図（詳細版）



玄一『無量寿経記』は、最初は高倉学寮において独占的に書写がおこなわれていた。その後の他派への流伝を見ると、浄土宗鎮西派では、一八九四年の越智専明『無量寿経講述』においても「記 二巻 已渡今逸ス 唐 玄一法師」と

しており、[54]実物は日本にはないという認識を示している。本願寺派でも同様にその状況にほぼ気づかないまま一定の期間が経過し、また実物の玄一『無量寿経記』の入手は遅れたものと思われる。[55]しかし、時がたち、伝来の詳細は分からないが深励がかつて所持したとされる『無量寿経記』はおそらく購入などの契機を経て、後に写字台文庫（龍谷大学図書館）におさまることとなったと考えることができる。[56]

註

(1) 丹山順芸（一七八五―一八四七）は越前出身で、深励の弟子である。

(2) 『善本叢書』（『日本古寫經善本叢刊　第五輯　書陵部藏　玄一撰　無量壽經記　身延文庫藏　義寂撰　無量壽經述記』國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所　文科省戦略プロジェクト實行委員會、二〇一三年）八、九、二二五頁。

(3) 前掲『善本叢書』九頁。

(4) 前掲『善本叢書』七、八、一四頁。

(5) 大谷大学の貴重書圓光寺文庫には『無量寿経記』が存在する。請求記号は宗大七四一四。深励の弟子徳龍（一七七二―一八五八）のさらに弟子の香山院龍温（一八〇〇―一八八五）がおそらく所持したのではないかと思われる圓光寺旧蔵の『無量寿経記』である（所蔵寺と書写の時期による類推）。これは一行二十字である。

これはすべてのページにおいて嘉永七年本と全く同じ文字の並びであり、嘉永七年本が不自然に切れているところも、まったく同様に不自然な位置のままで踏襲されているため、嘉永七年本を見て書写しているということができる。よって、卍続蔵経本へとつながるテキストというものではない。嘉永七年本から派生したもう一つの写本ということができる。

(6) 「菩薩」を表記する際「艹」と抄物書きで表記する割合は嘉永七年本よりもさらに増加している。

(7) 本稿ではこの問題と直接関わらない②⑤⑦は特に扱わない。

(8) 東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』国書刊行会、一九八二年、五二頁。また小野玄妙編『佛書解説大辞典』大東出版社、一九三三年でもとりあげられていない。

たとえば、相伝教学系の註釈書で『大本私考』という『無量寿経』の註釈書がある（相承学園編『真宗相傳叢書』第六

巻、二〇〇五年）。また月珠（一七九五―一八五六）による『無量寿経』の註釈書に『大本知影録』という名の著書も存在する。

(9) たとえば『龍谷大学和漢書分類目録』龍谷大学出版部、一九三五年、三八四頁では、卍続蔵経本は「無量壽經記　上巻　唐　玄一」として載っている。

(10) 写字台文庫とは、西本願寺の歴代門主の蔵書であり、広如上人（一七九八―一八七一）が整理を命じてはじめられたものである。新写字台はそのうち昭和二三年に購入等によって図書館に収蔵されたものである（平春生「『釐正写字臺文庫目録定則』について」『龍谷大学論集』三八四号、一九六七年、一〇三、一〇八頁、『龍谷大学論集』三七三号、一九六三年、一一七頁）。これまでカード検索等限定された形でしか閲覧できなかったが、近年RWAVEによる検索においても写字台文庫の情報が引っかかるようになった。

(11) 当時はそこからしか読み取ることができなかったと考えられる。前掲『善本叢書』一八頁。

(12) また本写本の筆致は嘉永七年本へと受け継がれていっている。

(13) 二〇一九年、四月二十日アクセス。

(14) 丹山順芸が写した写本は、一九五三年の展観のときに「高山寺摹写」として紹介されている。（『禿庵文庫第五回展観目録：信珠院順藝師遺著遺墨を中心として』大谷大学図書館禿庵會編、一九五三年）そこではもとの本を意味していると読み取ることができ、実際の中身をいくつかの観点から比較すると書陵部本は丹山本と全く同一であることがわかるので、そこからも書陵部本はやはり高山寺旧蔵と考えることができる。

丹山が書陵部本を臨写した年には、後述するように深励の指示によって高山寺から写した本（瓊林書写＝龍大蔵本）はすでに存在することになる。もう少し完璧な書写をするものとして弟子となる丹山が臨写をおこなった可能性もある。あるいは丹山が個別に深い関心をもち書写をおこなったのかもしれない。いずれにせよ、丹山順芸の頃までは高倉学寮と高山寺の関係は継続されていたと考えられる。（前掲『善本叢書』、二二五頁参照）

(15) 丹山順芸本の書写年代は分かっていない。ここでは特に根拠のある推測ではなく、単純に年齢差による推測である。深励と丹山はともに越前の出身であり、師と弟子の関係にある。深励は一七四九年生まれ、丹山は一七八五年生まれであり、三六歳差である。

(16) 開轍院隨慧（一七二二―一七八二）の弟子に易行院法海がいる。第八代講師となる。その易行院は、『無量寿経庚寅録』（一八三〇年）『無量寿経辛卯録』（一八三一年）という講録を作成する。福井県金津町永臨寺には、その法海が『玄一疏』を永臨寺（おそらく深励の子息）に貸してほしいと依頼する旨の書状が存在する（後述）。手紙は永臨寺蔵。香月周明様に見せていただいた。

(17) 『続真宗大系』第二〇巻、国書刊行会、一九七七年、二二四頁（『大谷派学事史略年表』五〇頁）。

(18) 香月院深励『浄土三部経講義1　無量寿経講義』法蔵館、一九八〇年、二頁。

(19) また他の三本は、この時点ですでに刊本化もなされている。慧遠『無量寿経義疏』は寛文九年（一六六九）、伝吉蔵『無量寿経疏』は元禄八年（一六九五）、璟興『無量寿経義連義述文讃』は元禄一二年（一六九九）。

(20) 『垂天結社簿』一巻、二十一丁左。もう一つの地域別で分けた『垂天結社簿』では、四十二丁左、永臨寺において閲覧させていただいた。また芹口真結子『近世仏教の教説と教化』法蔵館、二〇一九年、一九九頁にも瓊林の活動が描かれている。

(21) あるいは、その間に別の書写本があるかもしれない。

(22) 南氏は、「何を参照にして補塡したのかは不明である」（前掲『善本叢書』七頁）としていたが、筆者はそれはおそらく龍大本であると考える。

(23) ちなみに京大本は卍続蔵経本テキストを作成するにあたりさらに朱書き部分を増加させている。

(24) 前掲『善本叢書』五八―六六頁。ここでは嘉永七年本は卍続蔵経本とほぼ同じという意味で、校異結果を使用する。卍続蔵経本テキストは嘉永七年本の写真による写しで、いくつかの修正を加えたものだからである。実際には、京大本の過程でいくつか修正が入っており、少しズレはあり注意を要する。

(25) 「菩提」についても抄物書きによる表記が見られる。次の京大本では、後に卍続経蔵テキストを形成するために、再び抄物書きではない「菩薩」や「菩提」へと逆方向の修正が加えられている。なお、「抄物書き」や書誌についての筆者の知識の不十分な箇所に関して、京都国立博物館研究員の上杉智英氏に見ていただき訂正していただいた。

(26) 丹山臨写本ほどではないが、龍大蔵本は一行二十四字であるし、書陵部本を比較的忠実に描こうとしていたことがうかがえる。特に冒頭部は筆致も類似していた。

(27) またその臨写本である丹山順芸本も同じく正しい位置となる。

(28) 紙が貴重であったためか、無駄を回避する傾向にあったと考えられる。例えば、本写本では書き損じと思われるもの「又説无作者故言為无作无受者故言為無趣□経曰遠離至兼利述曰二口案調兼如文□棄國至財」を表紙の見返し（本来なら無地が望ましい）として利用している。

(29) 嘉永七年本にこの現象が見られることから、おそらく龍大蔵本は当初から二二〇年ずっと本文の一部を逆に閉じたままであり、再び綴じ直されることなしに現在まできているということが分かる。

(30) たとえば嘉永七年本からさらに写した圓光寺本でも同じく当該箇所の本文が乱れている。

(31) また嘉永七年本が、龍大蔵本からの系統であったとして、さらに同時に書陵部本や、当時すでに存在していたはずの丹山順芸本を見たか（見られる状況にあったのか）どうかという問題も存在する。それについては、筆者は見ていない可能性が高いのではないかと考える。もし見れていたのならば、この大きな移動箇所について気づき、どうしてそうなっているのかも判断して、正しい並びで本文を形成することができたはずだからである。

(32) 前掲『善本叢刊』七頁。

(33) 美濃にある興雲寺（大谷派）は雲華院大含（一七七三―一八五〇）の弟子で擬講をつとめた龍華院見瑞（―一八六七）がいた寺としても存在する。興雲寺本とされる『無量寿経記』は、その見瑞かその先代が所持していたものではないかと考えられる。なお興雲寺訪問の際は、責任役員の鈴木定一様、興雲寺を修繕されていた佐々木進様に様々なことをお教えいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

(34) あるいは現龍大蔵本そのものが興雲寺にあったかもしれない。

(35) （当然かもしれないが）龍大本にある識語はこれを写したと考えられる嘉永七年本には写されていない。現段階では龍大本にのみ唯一確認できる。

(36) 前掲『善本叢刊』七頁。「書像に寫る大谷大學の藏書印とその位置からみて(三)（＝大谷大嘉永七年本　※筆者補い）の複寫であることはまず間違いない。」と述べている。筆者も同意見である。

(37) 前掲『善本叢刊』七頁。

(38) なお、龍大本が本来なら書き損じであると後世の者に判断してほしかった「二、初結前。二」の箇所は、京大本もやは

り見抜けずテキストとして入れ込んでしまっている。

(39) 新写字台文庫として入った時期の詳細については、今後の検討が必要である。

(40) 今後テキストとして使用していく際には、南氏も述べられるように（前掲『善本叢刊』九頁）書陵部本の翻刻を中心としていくのがよいと考えられる。

(41) 『浄土宗全書』一四巻、山喜房佛書林、一九七三年、一頁。句読点は筆者が入れた。

(42) 『真宗叢書』第三巻、臨川書店、一九七五年、六頁。

(43) 『新編 真宗全書』二巻、一九九四年、二五頁。

(44) 慧琳『無量寿経貫綜記』巻一、二丁左。同じく深励の師である随慧『大経口義』（大谷大学図書館 宗丙一六〇）においても『玄一疏』が伝わっていないことが示されている。

(45) 『真宗大辞典』永田文昌堂、一九七二年、一二六六頁。

(46) 『新編 真宗全書』一巻、一九九四年、二一頁。

(47) 香月院深励『浄土三部経講義1　無量寿経講義』法蔵館、一九八〇年、二頁。

(48) またその中で一つ独立した形となるが、同じく高倉学寮の深励の弟子の丹山順芸によって（おそらく書陵部本から）本格的な巻子本の臨写もおこなわれた。もとの本である玄一『無量寿経記』の価値を示したのはおそらく師の深励であると想像できる。なお高倉学寮の子弟の関係などについては、大谷派教学研究所助手の藤原智氏に有益な助言をいただいた。

(49) そのうちいくつかは現在まで残っている。

(50) 翻刻にあたって、西脇逸子女史、龍谷大学教授の山本浩樹氏にご教授いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

(51) 『真宗大系』第一巻、六四頁。書写してまだそれほど時間がたっていなかったため、『無量寿経庚寅録』に玄一『無量寿経記』の書写の情報を長く示していると推測することができる。

(52) 龍温の大経の註釈書は『大経聞書』（一八六八年の続講を記録したもの）として残っているものがある。その巻一の一丁右には「コレニヨリテ漢土ニオイテ釋家の龍象トトナヘラルル浄影・嘉祥ヲ始メ璟興・玄一ノ疏ナラヒヲコナハレテコレヲ今經ノ四大家の註ト称ス」としている。『玄一疏』が現存していることがやや一般化しているように受け取ることができる。また他の箇所においても『玄一疏』を引用しているので、おそらく龍温は所持していたと考えることができる。

(53) 法海の手紙には日付に閏三月十六日とあり、閏年であったことから考え、また本講の担当が決まっていることも考えると（一八三〇年、一八三一年に大経を講義している）、一八二八年あたりが可能性としてはありうると考えられる。

(54) 越智専明『無量寿経講述』（一八九四、巻一、七丁左）

(55) 例えば、一八六六年の百叡『無量寿経聴記』では、「霊裕二巻 玄一二巻 義寂三巻 昔ハアリタリトミヱテ望西ノ疏等ニ引ケリ」と述べている。また松島善譲『大経聴記』（一八七三年あるいは一八七九年講義）においても「尚又浄影疏二巻、嘉祥疏一巻、元照ノ疏一巻、憬興疏三巻、此四部ハ現存シテ行ハレテヰル」（二十二丁左）と述べており、玄一『無量寿経記』が現存しているかどうかに関して積極的な言及はしていない。ただし恵麟『大無量寿経聴記』（一八六九年）では、「又玄一之疏アリテ栂ノ尾散中ニ■ンテアルト申スコトナレドモ未ダ世ニ流布セズ。私ニハ之ヲ見ズ」（一丁左）とあり、恵麟は見れてはいないが、この新しい情報を摑んでいたことがうかがえる。

(56) 本稿を執筆するにあたり、龍谷大学図書館の大木彰氏、永臨寺、興雲寺、龍谷大学図書館、大谷大学図書館、京都大学付属図書館の諸関係者に様々にお世話になった。最後になるが、厚く御礼申し上げたい。

キーワード 玄一 無量寿経記 無量寿経 深励 無量寿経疏 大経